

「東京新聞」の「平和の俳句」2月掲載の句から。「冬月光不戦の一句立ち上る 溝口玲子(80歳)」<いとうせいこう 美しく毅然(きぜん)と冷静に、そしてまたひっそりと静かに一句が立ち上がる。むろん思いがそうさせているのであり、それは月光と同調する。> 溝口氏は冬の月の光のように凜とした生涯を貫いている方であろう。時々、こういう方を見かけ、嬉しくなり、私もこれじゃいけないと襟を正される。

「平成は平和に成ったと書くのです 伊藤帆乃香(ほのか)(19歳)」<いとうせいこう 帆乃香さんは他にもたくさんいい句を送ってくれた。中でも平易なこちら。> <金子兜太 うまい、と思わず手を打つ。だが本物かと前を見る。> 平成の天皇は激戦地を訪ね、頭を垂れている。父、昭和天皇の贖罪と思われる。また、被災地や施設を訪ね、身を低くして見舞っている。国民と共にある象徴天皇の役目を果たしたいという表れであろう。退位発言は高齢で、象徴天皇の役目が果たせないから皇太子に譲りたいということであろう。憲法を改訂し「元首」になるより、現在の「象徴」でよいとする意志表示に思える。誠実な人である。しかし、天皇の言動で世論を動かしてはならない。かつて、天皇を利用して戦争に突っ走ったことを忘れてはならないからである。

「戦(いくさ)せぬ内なる声を引き受ける 田巻直人(なおと)(74歳)」<金子兜太 「引き受ける」に味がある。こころのなかのこの声を梶子(てこ)に、病氣療養中の自分を励ましているようだ。> 人は誰でも戦争はイヤだという「内なる声」を抱いている。しかし、争いの絶えない現実を見て、武力に頼ろうとする。武力では平和を作り出すことはできない。「内なる声」を「引き受け」、反戦、平和を求め続けることが、明日に責任を負う人間の証ではないか。

「トカゲ食い祖国の土踏み70年 吉田一男(95歳)」<いとうせいこう 九十五歳の吉田さんは戦時中ソロモン諸島にいてトカゲを焼き、塩やトウガラシをつけて食べて生き残ったという。この事実の重さ。> 兵站を受けられなかった日本兵は弾薬と食料が尽き、3分の1が餓死した。知性なく暴走する指導者の下では、国民はむざむざと殺されていく。

「平和の俳句 戦後72年」の「記者の『一句』」から。「腹巻きに粗糖しのばせ父帰る 比留間邦夫(84歳)」私は旧満州大連市で生まれた。戦後、父は職を失い、ソ連兵の宿舎で働いていた。ソ連兵が食べる大きな食パンやチーズを食べた記憶がある。ある日、父は腹巻きに沢山のお菓子を忍ばせて帰って来た。比留間氏の句から、その時のお菓子の美味しかったことを思い出した。「大連埠頭引揚げ前夜のロシア粥 太田泰(86歳)」数年前、大連市を訪ね、幼児期を過ごした、解体中の旧社宅を見た。アカシアの香りを懐かしく思い出し、大連埠頭にも行った。乗船したのは寒い冬だったと記憶しているが、太田氏も、この埠頭から引揚げて来たのであろう。

「雪降りつむ智恵の菩薩の廃炉かな 鹿子木真理子(78歳)」智恵を司る「文殊菩薩」からネーミングした高速増殖炉「もんじゅ」は廃炉を決定した。核は人間の智恵では制しきれないと受け止め、「もんじゅ」の廃炉を機に、脱原発に向かうべきである。

「行く先はわからず不安青みかん 吉沢功(75歳)」吉沢氏は前任地の教会の信徒で、「発信」や「平和の俳句」にしばしば掲載された投稿を読んでいる。「風にきくいったい何が正しいか 奥野淳(39歳)」ポスト真実という言葉が流行っている。安倍晋三首相、トランプ大統領の言葉は信じられない。プーチン大統領、習近平主席は権力維持のためなら何でもする政治家に見える。これら4人が、これからの世界を仕切るらしい。ゾッとする。奥野氏が詠っているように、人間の尊厳を守る正義のあり方を知りたい。